

GR
白雲軒

とりね



36

昭和51年1月1日

宗教法人

鳥居観音

表紙の説明

白雲山 救世大観音全景

中央	総高	台座共	三十三米
脇仏	総高	台座共	二十二米
台座（堂宇）	床面積		百九十八平米
総重量			一千トン
風速五十米に耐える。			
標高			四百八十米地点

目次

○ 昭和五十一年の新年に当って		桐江	一頁
○ 道光禪師御法話			二頁
○ 明るい生活		光山善雄	四頁
○ 西遊記	其の三十一	岡部千三	六頁
○ 田舎医者	其の十六	見川鯛山	九頁
○ 互禮関係者			十二頁
○ 鳥居観音だより			十四頁

昭和五十一年の新年に当って

八十四翁 桐江

皆様新年おめでとう御ざいます

昨年は色々厚いご協力を賜りありがとうございます。本年もよろしくおねがい申し上げます。

本年は辰年です。私はこれで七回の辰年を迎えることができました。

おかげ様で、信仰を通じて、宗教法人、白雲山、鳥居観音の発展に力を注いでおります。

昨年、鳥居観音の開山三十五周年を迎えるに当りまして、地球愛護、平和観音の落慶開眼の法要を挙行いたしましたのも、地球上に起っている種々な問題を苦慮して、観音の大慈悲によって、衆生齊度を得ますように、私の一途なねがい止みがたく考えた結果であります。今後毎に、世の多くの人々が、来山されて、この平和観音をごらんになった時、人類の平和を心によみがえらせていただければ誠に幸いです。

鳥居観音が年と共に発展いたして参りましたのも、観音信仰厚い四方有縁の方々が、お在りになったからでありまして、誠にありがたいことです。

宗教法人としての鳥居観音の面目も、ようやく整って参りまして、年間行事も定着して執行いたし、年々多数のご参加を賜っておりますのも信仰厚い方々のおかげと存じます。

一面又当山の境内、園内の花木も年毎に成木いたし、春のつつじは格別となりました。

又本年からあじさいの花がきれいに咲くことと存じます。花期も長いし、花のない時季なので、昨年は大変よろこばれましたので、本年は昨年以上のものを咲かせたく心がけております。

秋の紅葉は春のつつじ以上にすばらしくなりました。三十年の肥培管理撫育の甲斐があらわれてきました。数種類の楓が、染め出した、濃淡の紅が、朝日夕映えて輝く時、筆舌につくすことができません。本年もどうぞご来山下さるようおねがいたします。



道光禪師
（故高階瓏仙猊下）
御法話

修養八条訓

この八条訓は東京のある家庭の希望により日常の修養訓としてかき与えたものです。もとより修養訓としては、なお適用の簡条を欠いている感じはありますが、この八条を精神のうちにもっていれば、枝末の行為はおのずから美しく発揮されるのであります。

第一、人は常に心に不足を持つまじきこと。

仏教ではこの世を娑婆しやばといっています。娑婆とは勘忍土ということですが、人は何事にも心のままを望みますが、とても満足できないのがこの世の定まりとあきらめて、不足の心を持たないよう辛抱すべきであります。

第二、人は徒らに腹を立つまじきこと。

ものの道理のわからない人は、勘忍の力が足りないので、常に心に不平をもちます。これは自分と自分の心をおさえる力が足りない振舞いであります。人の本心は平和なものであるのに、不平を起こして腹を立てることは、その心に波風を添えるのでありますから、それはやがてわが身をくつがえすものと、よく合点して勘忍が大事であります。

第三、人は益なき我慢を通すまじきこと。

天地の道は正直であります。その正直が神仏のご精神であります。ゆえに人は正直であれば、道になつて、神仏のみ心と合体します。けれども、剛情我慢で意地っぱり根性の強い者は、神仏のみ心にそむいて、憎しみを受けるものでありますから、他の人々からも自然に同情を失つて、いつも心のうちで独りで悶もたえておらねばならないのです。

第四、人の行いには蔭日向あるまじきこと。

人の目には、見えるところと、見えないところとありますから、蔭日向があるけれども、天地の

鏡には表裏がありません。神仏のお眼には明るいとか闇いとのへだてはありませんから、人の仕業をいつもごらんになっています。ですから親の目、主人の目、夫の目、女房の目、世間の人の目に見えないからといって、自分の勤めに表裏がある人は、いつかは人の信用を失って、ついには自分の立場をなくしてしまふようになるものであります。

ゆえに人の前ばかりを飾るような、ひれつな心はゆめゆめつつしまねばなりません。

第五、人はすべて物事に後と先を考うべし。

すべて物件は、今のが今すぐできたのではなく、皆できてくる本があります。それを仏教では因果を知らねばならぬといひます。

昨日のことが今日に及んでいくのですから、何事も油断してはなりません。若いときの怠りが年をとつての不仕合せとなります。また自分が他の人のために親切を運べば、人もまた自分に親切を向けます。ですから人は目先のことばかりを考えていてはなりません。

それだけでなく、この世の中の仕事か、みな未来世の果報をつくるのですから、悪い種子まきをしないように、その日その日のつとめに用心をしなければならぬのであります。

第六、人は常に己れの及ばざることを顧みるべし
人はいささかでも自分にすぐれたところなどがあると、偉い気になりたがるものであります。それは、もつてのほかの心得ちがいであります。世間にはそれからそれと、上には上があることを知らなければなりません。自分で自分を偉い者にして、氣位を高くするから、人の仕向けに気がいらぬことがあると、不満に思い、腹が立つ、その上いつも人を馬鹿にしたくなるのであります。すべてこのたかぶる心が必ず身の災いを招くものでありますから、何事にも自分の及ばぬことを顧みて、いつも氣を低くしているのが出世の道であり、安全の道であることを忘れてはならないのであります。

第七、日日の勤めは御恩報謝と心得べし。

世の中は人のために働くと思えば、その人の礼の

言いよう、報酬の仕方のわるいことなどに腹が立ちます。また自分のために働くと思えば、ややもすると怠けたくなります。しかし、私たちがこの世に在る限りは、どんな人からも被っている四つのご恩があります。父母の恩、国王の恩、世界万物の恩、三宝師長の恩がそれであります。ですから日々の勤めはそのご恩報謝であると思えば、人に不足をいうこととはないだけでなく、自分の勤めにいそがしいほど、人一倍のご恩報謝ができてありがたいと思うようになります。

第八、天地の間に神仏いますこと。

神仏を信ずるのはいわゆる宗教心であります。宗教心と云うのは人の心の底の現われです。人は何事でも誠を土台にしなければ成功するものではありませんから、常に頭のなかに神仏を敬う観念を失わないようにしなければなりません。その心から、祖先を敬い、親を大切にしなければならぬと云う美しい国民道徳も現われてくるのであります。

(以下次号)

明るい生活

光山 善雄

「明けましてお芽出とう」と年頭のあいさつを交換して、お雑煮を頂く、この新春の喜びはお互いにまた新しい年を迎えることができましたという感謝のよろこびでもあります。

仏だんにお供えや、お灯明をあげて静かに合掌礼拝し、過去の罪をさんげし、将来の希望を念願し寿ぎ奉ることは、仏教徒として、なつかしい正月の行事であります。

このお正月の「日の丸の旗」の輝くごとく平和な姿がわれわれの理想でなくてはなりません。全世界がこのお正月のような、温和であったならば、世界の人々は幸福と思えます。

釈尊を始め世界の聖者たちは数千年の昔から平和の法鼓を打ち鳴らして来ましたが、過去の歴史は戦争で終りました。晴天であっても、いつ台風がやってくるか、わからないのが世界の現状です。日本は世界の中心であります。文化日本の父である聖徳

太子は、世界人類の歩む道を示したまい「和を中心」とする睦み合い、助けあい、はげみ合い、そして明るい、住みよい、文化国家の建設が目的でありました。先ず家庭を明るくし、隣人にも飢えたる者なき、争いなき社会を一日も早く築くことであります。「合掌礼拝」により一億国民が一つになり、合掌の花を国内一杯に咲かすことです。ここより人間の平和と幸福は誕生いたすことでしょう。

光明皇后の慈悲と布施（前号より）

庶民の浴場を開設して国民の友となつて、身も心も洗滌されました。

またライ患者に救いの手をさしのべ、施浴された時、九九九人の垢をおとされ千人目にウミ血の流れる、ライ患者が出てきて、「どうぞこの業病ごうびょうのウミ血をお吸い下されば全治すると申します。まことに尊い方に申してすみませんが、何とぞお願い申し上げます」と光明皇后にお願いしますと、皇后は「ハイよろしい。誰にも別はないのです」と御せになつて、

患者に口をつけてそのウミを吸われ、患者はその布施行におどろきと尊敬を捧げました時、患者はたちまち仏さまの姿と化身しました。皇后は「これは観音さまが慈悲の行をためすために、ライ患者となつて現われられたのであらう」と、信仰はますます強くなりました。この奇蹟は世界の歴史になき慈悲行でありまして、信仰なくしてできるものではなく、全く観音行の実践であります。

平安朝になりましたも、各宗派を超越して観音信仰は繁栄しています。

西国の三十三カ所の靈場は今日なお、参拝者で繁昌しておりますことは、国民の心の中に親しまれ、とけこんでいるからでしょう。一応観音経を手にとれば、短い経ではありますが、心の灯として、心の糧として、心の支えとして、今後世界人類の灯となるものと信じます。

仏教界は各宗派に分かれておりますが、観音の信仰は排他性がなく、寛容性をもって、いかなる時代いかなる民族にも愛されていきます。



西遊記

(其の三) 一
岡部千三

通天河

ぞろぞろあつまつてきた坊さんは、悟空のからだの毛を持っていた。それは、石や木をはこんでいたとき、悟空に助けられた、あの人だった。

「おかげさまで、これからは、あんなくるといことをしないですみます。ありがとうございます。」と礼を云った。

通天河

法師と三人のですが、通天河という、向う岸が見えぬほどの大きい川のほとりにきた時、八戒や悟空を見た村の老人が、

「ばけものだ、れいかん大王の手しただ。」と、ころげるように、にげだした。

「これこれ、おどろくでない。これは、わたしのとももの、ばけものでも、まものでもない。にげだすわけを話してくれ。」

三蔵法師がやさしくきくと、その老人は、おそるおそる身のうえ話をした。

老人の名は陳澄と云った。女の子が一人、男の子が一人あった。老人は、ふたりの子供を宝物のように大切に、可愛がっていた。ところが、近くにれいかん大王と云う化物がいて、ふたりの子供をわたせと、無理なことをふっかけてきた。

「可愛い子供を、化物にとられると思うと、かなしくて、かなしくて、毎日泣いてくらしています。かわりの品をやると云っても、化物はききいれませぬ。まったくどうしたらいいでしょう。」

陳澄は、涙を流して話した。

「わるいやつだなア、そういうやつをたいじするのが、おれはだいすきよ。しんばいすることはないよ、ね、おししょうさま。れいかん大王をやっつけて村人のなんぎをすくってやりましようよ。」

悟空は、うでをたたいて云った。

「それがよい、大王の心をなおしてやろう。」

法師は、悟空と八悟を、れいかん大王の所へやることにした。

悟空は、術をつかって男の子になりました。八戒は、女の子にすがたをかえた。

村の人たちは、二人をかついで、大王のすみ家につれて行った。

ところが、大王は、二人がにせものだと云うことを早くも見ぬいて、

「れいかん大王さまをだませると思うのか。このふとどきものめ。」と、いきなり、二人にぶちかかってきた。

「化物め、何をいうか。」

悟空が、どなりかえすと、八戒は、まくわをもつて、大王をふせいだ。

一人に二人では、大王もかなわない。

「おぼえておれ。」とわめきながら、どこえかすがたをかくしてしまった。

そのよく日、法師たちが川をわたろうとすると、

一晚のうちに川がおおって、舟を出すことができな
い。そればかりか、まだ秋のはじみだと云うのに、
雪がしきりにふつてきた。

「きょうは、とてもおでかけにはなれません。」

わたしの家で、氷のとけるまで、ゆっくりおまち
になつてはいかがでしょう。」と陳澄がすすめた。し
かし、法師は、いそぎの旅を思うと、そうしてはい
られない。

「しんせつはありがたいが、わたしは、さきをい
そぎますので。」

「では、せめて一日、おまちください。」

陳澄が、しきりにとめるので、その晩も老人の家
に泊った。

あくる朝、早くおきて、外を見ると、やっばり雪
がふつていた。

「氷はなかなかあつまいようだ、悟空のきょうだい
よ、氷の上を渡っていく人もあるようだから、わし
らもあるいていこうよ。」

八戒が、まぐわで氷をたたいて云った。

「しかし、とちゅうで、氷がわれたら大変だぞ。」

「なアに、だいじょうぶ。わしは天上で、天の川のとりしまりをしていたから、水や氷のことはよく知っているのだ、おししょうさま、ごしんばいはありません。」と、八戒はまぐわをよこにしながら云った。

「なぜ、そんなことをするのだ、あきにくいじゃないか。」と悟空がどなった。

「ところが、そうではないのだ、悟空のきょうだいには、つよいけれども、水のこと、さっぱりわからないらしいな。いいかね、長いものをよこにもつていれば、もしも氷がわれても、両はしが氷につかえて、からだはおちないのだ。」

「なるほどなア、八戒にそんなちえがあるとは、きょうまで知らなかったよ。」

悟空も、感心した。

八戒は、はじめて悟空にほめられたので、大とくである。さきになつて、いばつてあるいていっ

た。ところがわるいやつが、これをまっていた。それは、きのうの化物のれいかん大王であった。

大王は、法師たちが川の中ほどまで行つたとき、術をつかつて、いきなり氷をわった。

めりめりと、氷にさけめができた。さけめが大きかったので、せつかくよこにしてもつていた棒も、やくにたたない。

「あつ」……

法師も白馬も、悟空も八戒も悟浄も、たちまち、そのわれ目におちこんでいった。

化物は、法師をとらえて、六尺もある石の箱におしこんで、川のそのすみかへ、かついでいってしまった。

悟空、八戒、悟浄は、びしょぬれになって、氷の上へはい上つたが、法師のすがたが見えない。声をかぎりに呼んでみたが、さっぱりわからない、へんじもない。

(以下次号)



田舎医者（其の十六）

見川 鯛山

挿絵 おおば比呂司

残 暑（前号から）

棒に刺したジャガ芋を凶器のように突き出して、私の口に押しこんだ。

「さっ、食ってみんせ、まだ熱いだがな。」

やけどした唇を手でこすって、私はもう、何も口出しをしないことにした。

父ちゃんの胸に聴診器をあてると、心臓がすつきり駄目だ、弁膜が破れて、こわれたポンプのよう

に、いくら吸いこんでも血が逆もどりするのだ。きびしい寒冷の火山灰地を掘り起こし、切り開いた、つかれはてたガラクタ心臓が、苦しげにきしんでいた。

「父ちゃんは、長くはもたない」

私が母ちゃんにそっと告げると、彼女がおろおろと悲しんだ。

「何億だものな、もう働かんでもいい、テレビ買って、これから、うんと楽しめるぞ、長生もしないとそんだな。」私が父ちゃんにいうと

「先生も、そういうだ。テレビ買うべな。うんといいテレビをな、父ちゃん。」

そっと、ふとんをかけながら、母ちゃんが云った

猫ばば

木がらしが吹きつけると、道の落葉がかきこそと音をたてて流れ、吹きよせられ、酔っぱらった金五郎の足もとでじゃれていた。

町から、彼の開拓部落へは、この別荘地を通りぬ

けると近い。とつくに人っ気のない別荘の赤い屋根青い屋根の破風で、冷たい風がふるえながら鳴った裸の雑木林の向こうの空を真紅に染めて、燃えるような夕日が沈みかけていた。

ふと、金五郎は立ちどまり、夕日にむかって両脚をふんばりながらズボンの前を開けた。ホカホカと春のようにあたたかいほろ酔いの彼のからだから、大きな音をたてて、落葉の上に長い放尿がつづいた。そのとき、金五郎は道端の溝の中に、色あせた財布をみつけた。

小便をたれながら、金五郎は云った。

「ふん、おれが拾うとでも思ってるだべ。あんなの、中はからっぽなんだ。なんにもはいっちゃいねえだ、たいていは……」

しゃべると、酒くさいその白いいきを、寒い風がもぎ取っていった。

金五郎はおちつき払って前のボタンをかけた。そして二、三步、後ずさりしながらまたブツブツ何か云う。

「拾ったってむださ、ぜになんか一銭だってはいっちゃいねえだから……。うそだと思うだらためしてみっか？」

と、彼は大きいそぎでかけより、その財布を拾った中に札があった。一枚、二枚、三枚、四枚、五枚……六枚、かぞえながら彼の口はばさばさ乾き、酔いがすっかりさめた。

一万、七千、四百円!!

小さく叫ぶと、まばらに残った彼の黄色い歯がカチカチ鳴った。

財布にはまだたいへんなものはいっていた。名刺が二枚と、半紙に包んだ……写真だった。

名刺は二枚とも同じ小型で、「安森みち子」とあった。きつと落ち主なのだ。

「あっ!!これ安森別荘の奥様のだ、あの美人の、あんなえらい人の……」

しばらくの間、金五郎はあやしい写真と、名刺を見くらべながら、棒ぐいのように突立っていた。

翌日、彼が相談にきた。病気のときはなかなかこ

ないが、ほかの一大事が起きると、彼はいつも真先に私を訪ねてくるのだ。

「返さねえわけにアいくめえな、これだけあつといい正月ができるだが……」

鼻水を袖でくちやくちやくすりながら彼がいった。

「まあ、そうだな」

「東京の本宅の方さ、云ってやったもんだべかな？」

「どうしたもんかな、名刺がはいっていても、果たしてあの奥さんの財布だかどうか……」

「いちおう、警察へ届けたほうがいいのじゃないか、落とし主のほうだって、紛失届を出してるかもしれないしな」

私が首をひねると、金五郎は私よりもっと首を曲げて考えて、そしていった。

「問題は、この……写真だわな。こんなもの、はいってれば、なんとか罪になるのでねえのか？ そうだとすれば、やたらにおとし主は警察さ届けねえ

べよ。それに、女の人だら余計はずかしかった……おれがうっかり警察さ出しちゃったばかりに、安森様の奥様に迷わくかけちまっちゃ申しわけねえもんな」

と、彼のほうが私よりよけいに首を曲げただけ、考え方は慎重だった。

「なるほどね」

私が感心してたら、かたわらで私の女房が云った
「一万何千円もはいってるんだろ、写真のことでちよつとぐらい恥ずかしい思いをしたって、わたしなら紛失届は出すね」

やっぱり別荘の奥さんとは違うのだ、うちのやつは……

「普通の人は、だれだってそう思うだー」

と、金五郎はむきになってしゃべりだした。

「だけんどよ、安森別荘の奥様だとすつと、どうだかな。おれあの奥様よくしってるだ、夏、別荘を開けてる間、ずっと豚の餌もらいにいってるだ。

(以下次号)

謹

賀

新

春

東京	東京	東京	鶴見	名栗	名栗
顧問 小佐野賢治	顧問 鷺見保佑	顧問 渡辺綱雄	顧問 岩本勝俊	平沼とみ	開祖 平沼弥太郎
名栗	名栗	名栗	大宮	東京	東京
責任役員 有馬忠直	責任役員 町田真之亮	顧問 平沼宏之	顧問 平沼康彦	顧問 佐野友二	顧問 桐木光三

飯能市	川口市	名栗村	飯能市	名栗村	名栗村
護持役員 梶谷真一	護持会長 飯塚孝司	監事 平沼幸一	監事 武居藤吉	責任役員 岡部千三	責任役員 小林高安
名栗	川越市	青梅市	東京	東京	東京
護持役員 町田伸太郎	護持役員 斉藤新作	護持役員 小峰久治	護持役員 新妻治郎	護持役員 若林とく	護持役員 今津政雄



川越市	川口市	与野市	飯能市	所沢市	狭山市	名栗村	名栗村
川越講五〇名 原田 愛助	川口講一五〇名 飯塚 孝司	埼玉トヨベツト講 七〇〇名 梶谷 真一	護持役員 水上 清	護持役員 小山権之函	護持役員 井上 竹吉	護持役員 枝久保鶴四郎	護持役員 吉田仙太郎
羽村町	川口市	青梅市	狭山市	川越市	飯能市	飯能市	入間市
青梅講六〇名 宮沢庚子生	大柳講三〇名 荒井 もと	千ヶ瀬講五〇名 小峰 久治 荒井 多一	狭山講一五〇名 井上 竹吉	新友講五〇名 斉藤 新作	畑講二〇名 植竹 真三	護念講二〇名 横川 一郎	豊岡講一五〇名 粕谷とし 粕谷つる 山岸トリ

東京	飯能市	秩父市	加須市	越生町	坂戸町	浦和市	五日市町
練馬講一五〇名 平沼杉之助	飯能講一〇〇名 武居 藤吉	秩父講五〇名 小池 清 松本忠太郎	加須講二〇〇名 宇和野拓植	梅園講三〇名 畑 くに	坂戸講三〇名 若松 正数	浦和講一〇〇名 藤沢 帝	五日市講五〇名 鈴木 嘉三
	名栗		朝霞市	東京	東京	所沢	東京
田島 仲太郎 町田 治 浅見 寅雄 浅見 富藏 松下 愛吉 平沼 幸一 佐野 正助 岡部 健次郎 野本 栄治 吉田 仙太郎		名栗講三〇〇名	大和拓友会 黒田 一〇〇名 杉沢 慶一	福徴講五〇名 新妻 治郎	板橋講五〇名 榎本みや子	所沢観音講 二〇〇名 小山権之函	浜田屋講三〇名 吉崎 弘

鳥居観音だより

終了した行事（後半期）

七月十六日 施餓鬼供養

東京はお盆なので、施餓鬼供養はそれだけに意義のある行事となりました。

救世大観音の堂宇内に、お受けした多数の塔婆をかざって、午後二時から供養会を挙行了しました。

供養塔婆は、例により庭前の供養塔に納められています。

八月十六日 流灯法要と其他の行事

恒例になった、流灯法要はおかげ様で、年毎に盛大になって来ました。当日は団体で参拝の方もありまして、庫裡す、本堂もにぎわいました。

午後四時から本堂で、灯籠の法要が始まりますと、花模様灯ろうは電気にてらされて美観そのも

のでした。

夏の行事として、行なわれてきた、この流灯法要は風流的な、生活から信仰と云うおごそかな、祖先へのつながりをもつ自己を発見することには、誠によい行事であります。

これに合わせて、花火奉納打ち上げと、盆踊り大会とが展開されて、来山された、各方面の方々は心



（本堂に於ける流灯法要）

からたのしんでおられました。涼しいゆかた姿の善男、善女、家族うち揃ってこの行事をたのしむ人人、夏の夜の行事は昔から伝えられた、美しいものです。

九月十八日 石彫の観音奉納

篤信者として、毎月気やすく、「おい、今日は」

と云って、ご来山下

さっている、朝霞市

の、広瀬秀雄様から

石彫、聖観音(浮彫)

をご奉納いただきま

した。

この仏像は上野の

石屋で見つけられて

から、日参してやっ

と手に入れられたと

云う程の、ご熱心さ

には心から敬服いた

しております。

場所も本堂下の芝

生奥に、安置されま

したが、奉安当日は

ご自分で搬入のご案内

何をしてこられました。

石像は台座共、一、八米の高さですから、トラッ

クからおろすのにも、お手伝いをされて、その日の

うちに安置されました。

仏像と一緒に二個の大灯ろうの台石も奉納になっ

たのですが、これは徳川時代のものだそうでした、

色と重量感には、当時をしのげるものがあります。

一個の方に九州石の灯ろ安置、うち一個は「つ

くばえ」として石屋にはらせて、運ばれました。

観音様の左がわに「どっし、」と置かれたつくば

えには、寛から清水が流れおちています。

その、お水をひしゃくにくんで、観音様のお体を

清めると、御利益があると説明する人もあります。

十月二十六日 大和拓友会役員会

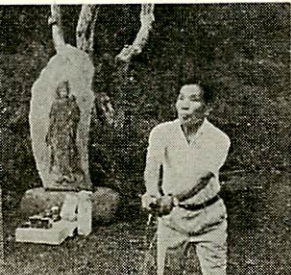
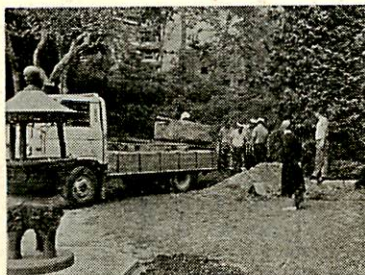
満蒙開拓青少年義勇軍大和拓友会の役員会が庫裡

に於て開かれました。

黒田会長を始め、前会長松沢さん外二十数名が来

られて、兄弟も及ばないような関係にあられるだけ

に、話されることも友情の糸が結びついて、感動の



(建立に自ら手伝われた広瀬さん)

外ありませんでした。その趣旨は、当山が満州で開拓に当っていられた地に似ていると云うことから、友の霊を白雲山頂に、記念碑を建立して永久に残そうと云う情熱にもえた協議でした。

同会はすでに何度もつつじ苗、さくら苗を贈られて山内に植えられています。記念碑が建つと又その周辺は一そう整理されることになりましょう。

この日もかえで数十本をおもちになって奉納いただきました。

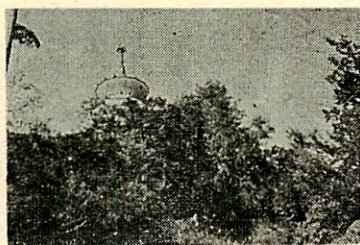
記念碑は来年建立される予定で計画が進められています。

大和拓友会の精神は千左不めつ、当山にとどめられ救世大観音近く大慈如来の膝に守護されることになりす。

このように、今後当山に対する人々のお心が、いろいろの形で、信仰されることになると思う時、仏縁と云うことを強く感ずるものであります。

十月二十五日 紅葉狩り開始

今日から一ヶ月程の期間を以て、紅葉狩りを開催



(三草塔附近の紅葉)

ームで三日にわたって探勝されたことも、自衛隊の一团の探勝からフリー参拝の人も数多く、本年になって当山の紅葉のすばらしいことは、奥武蔵の唯一のものだとほめたたえられるようになりました。この紅葉が今この

しました。まだ色づきかけたと云った調子でしたが、十一月に入りましたら、一日一日あざやかな色が染め出されて、人々はすばらしいとほめたたえる日が続きました。小



(来山された一团)

ようにすばらしくなったことは、開祖平沼先生の將來へかけての風致実現へ手をつけられた賜でありまして、そのお考えが今このようにうつくしく実り来ったのであります。



(紅葉の山を見おろす平和観音)

本堂附近の紅葉は十一月の中旬もきれいでした、山内遊歩道から入って、仁王門近くと平和観音から三蔵塔附近をながめると、又その美は格別でした。救世大観音の前庭から真向いの三蔵塔附近は一面の紅葉で人人等しく目を見張りました。夕陽に映え

た紅葉がもえるようでした。

十一月十七日 秋季例法要

恒例の秋季例法要を午前十時三十分から。本堂にて開祖平沼先生ご夫妻、駒込、大門寺服部老師、役員、講元、篤信者各位のご参列を賜り、地元梅花流会員三十名の婦人による御詠歌奉詠に始まり、順次玄奘三蔵塔、救世大観音へと法要は進められました。



(玄装三蔵塔庭前の法要)

た。好天に恵まれ折から紅葉狩りの期間中で一般の参拝も多くて、終日にぎわいました。本年は紅葉も散りつくさず、まだ美しい色をとどめていましたので、よろこばれました。救世大観音の堂内の仏像は数多く

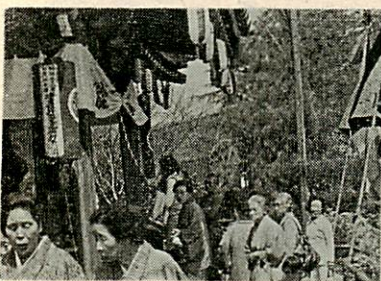


(救世大観音の法要)

ありますが、これもすべて桐江先生の謹作でありまして、参拝する人がみなおどろきのまなこを見はつておられました。

春と秋の例法要には特に、壹万體観音の法要もなされるので、仏縁をもたれる方は勿論、一般のご参拝も多数あつて、盛大でした。

十一月十八日、参道大灯ろう二期分建立



(本堂に参拝される人、人)

すでに参道に第一期の大灯ろう二十三基が奉納されて、朱の色が人の目をひいておりますが、この度第二期の分の内、十七期の奉納がありましたので、その建立に着手しま

した。始めからの奉納者芳名は次の通りです。

。一期分

参基	壹基	貳基	壹基	壹基	壹基	壹基	壹基	壹基	壹基	壹基	壹基	壹基	壹基
与野梶谷真一殿	川口大野元美殿	所沢野村喜好殿	名栗平沼宏之殿	大宮平沼康彦殿	栗岡野千三殿	東京矢島武久殿	東京桐木光三殿	東京若林とく殿	入間市平岡くに殿	入間市平岡徳次郎殿	入間市平岡徳次郎殿	入間市平岡徳次郎殿	入間市平岡徳次郎殿

二期分

老基	老基	老基	老基	老基	老基	老基	老基	老基	老基	老基	老基
東京	東京	東京	浦和	東京	東京	東京	所沢	所沢	所沢	所沢	所沢
鈴木	内田	阪本	藤沢	鈴木	今井	三信	岡田	小高	大館	平岡	萩原
梅子	桂一郎	喜太郎	帝	木きせ	豊子	工業	喜作	太助	正三郎	喜代志	一男
殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿

老基	老基	老基	老基	老基	老基	老基	老基	老基	老基	老基	老基
所沢	所沢	所沢	所沢	所沢	所沢	所沢	所沢	所沢	所沢	東京	東京
小暮	北田	北中	萩原	沢田	見沢	新井	本橋	小山	肥田野	豊田	浜口
博亮	加納	有志	喜男	源一	孝	富次郎	俊男	権之丞	孝	れん	求
殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿

巻基 所沢 指田 和生殿

西沢 喜久寿殿

巻基 所沢 粕谷 金司殿

粕谷 治策殿

尚五基が、芳名をただけになっておりますので、ご協力賜りたく、お願い申し上げます。

十二月九日 午前十一時 拓友会建碑地鎮祭執行。

白雲山頂救世大観音下の広場に大和拓友会の建碑による地鎮祭が執行されました。

会長黒田氏、前会長松沢氏、当時の久保团长出席。

十二月十日 十時 大黒祭執行。

春の行事

一月一、二、三日 新年祈禱会 十時より

一月十七日 月例法要 毎月十七日執行

二月三日 節分会 十五時

二月十五日 積尊涅槃会 十時

自三月二十日 梅、さくら祭り

五月二十日 つつじ祭り、ふじ祭り

四月十七日 春季例法要 十時

六月一日 あじさい祭り。

都心から日帰りのできる、ご家族、各種グループ、信仰団体等の精神修養に、健康体力づくりに、理想的の霊場です、近代的な感覚によって堂塔が点在、老杉老檜の間をぬって歩道が通じ、数知れぬ花木の花や蕾が人々の目をたのませてくれます。

とりゐ 第三十六号 発行日 昭和五十一年一月一日
編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三
発行人
印刷所 浦和市仲町三一八―十五 武州印刷株式会社
発行所 鳥居観音 電話〇四二九七(九)〇四一七番

白雲山

鳥居観音
観世音センター案内図



春の行事

○新年祈禱

1月1日10時～1月3日まで

○小正月祈禱

1月15日10時

○祈禱料

金1,000円 金2,000円 金3,000円以上

願旨 家内安全、交通安全、商売繁昌

安産、縁結び、試験合格 等

花のお知らせと法要

○梅 さくら

3月下旬より4月中旬まで

○つつじまつり

4月1日より5月末

○春の例法要

4月17日 午前10時30分より